

2010年の年頭にあたり-GSJ allに期待する

加藤 碩 一¹⁾

今年4月から産業技術総合研究所(産総研)第三期中期計画が始まります。国内外で政権も交代し、アジア各国の地質調査所相当機関も改編が予定されています。まさに世界的経済不況を背景にした“Change”の荒波の中で、われらGSJが良くそのミッションを果たし、どう進んでいくか正念場を迎える新年です。

歌の文句ではありませんが、時世時節がどう変わろうと徒に右顧左眄することなく、粛々と中長期的視点に立脚した不易の調査研究業務に邁進することは言わずもがなです。今蒔いた種がすぐ花開かなくても、来年、再来年あるいは次の世代で実を結ぶべく着実に進められるべきであります。例えば、大陸棚延伸問題でGSJが長年にわたって蓄積した海洋海底調査研究成果が大きく貢献したことは、特筆されるべきでしょう。

一方で、限られた研究リソースを限られた期間に最大限活用し最高の成果を上げ、所内外でGSJの存在意義をさらに高めるためには、ユニット・分野を超えた一層の連携が鍵になります。個人の評価も大事です。グループ・チームの評価も大事です。ユニットの評価も然りです。しかし、複雑な地球を対象にして、様々な側面から総合的にかつ効果的に解明していくためには、狭義の評価を意識し過ぎずそれに捉われない個人～組織的な様々なレベル、ひいてはGSJ allでの協力が不可欠です。第三期に向けてすでに動きが始まっています。

幾つか、事例を挙げましょう。昨年4月に活断層・地震研究センターが設立された際には、旧活断層研究センターのみならず地質情報研究部門等の地震関連の研究者を糾合して、より効果的に地震関連調査研究が実施しうる体制を、関係者の尽力で築きました。1ユニットの利害得失ではなく、GSJ allの傘の下での協力連携あつてのことです。また、昨今のレアメタルをはじめとする資源問題にも個別に対応するだ

けでなく、GSJとして組織的かつ戦略的に対応できるべく鉱物資源部会を立ち上げました。今後が期待されます。

もう一つのキーワードは、国際連携です。昨年は、特にアジア諸国から多くの訪問があり、また当方からもアジア以外にもブラジル・南アフリカをはじめ多くの国々のGS相当機関を訪れました。単なる表敬に終わることなくMOU締結や具体的な共同研究の立案、技術・研修協力、情報交換による知的基盤構築などに結びつきつつあり、これから一層の進展が望まれる次第です。多国間の連携でも、CCOP, CGMW, One-Geology他においてGSJの果たす役割は増大しており期待値も高くなっています。課題としては、相手側の事情もさることながら、個々の案件対応でなくGSJ allとしての国際戦略とアクションプランを立てることです。みなさんの智恵と協力を要請する次第です。

さらに、研究成果の社会への還元に資するアウトリーチ活動も、GSJ allで取り組むべきものです。昨年ひとまず終了した国際惑星地球年に対する日本からの貢献にも、IYPE Japan の中核としてGSJの果たした役割は高く評価されているところですが、また、ジオパーク活動についても事務局機能を担ったGSJの活躍は目覚ましいものがあり、あまり例がないことですが、3つの世界ジオパークを日本から提案してすべて認定されたのは、関係者の特段の努力の賜物でもあります。また、これによって従来にない地方自治体との連携が進み、GSJの認知度向上に大きく貢献しました。長年の実績がある地質情報展も、研究ユニットのみならず管理関連ユニットとの連携によるものです。これらによってGSJの活動に対する社会の一層の理解が深まったことは、日々実感されるところです。

いろいろな意味で厳しい環境下に置かれてはいますが、臆することなく凛としてわれらが道を進もうではありませんか。

1) 産総研 地質調査総合センター代表

キーワード: GSJ, 第三期中期計画, 連携, アウトリーチ